

八幡山岳会 70 周年記念 鼎談

堀勝幸顧問 昭和 13 年 1 月生。平成 15 年～16 年副会長、同 17 年～26 年会長、同 27 年山岳救助隊隊長

芝田肇顧問 昭和 15 年 2 月生。平成元年～9 年副会長、平成 10 年～14 年会長、長く県自然公園管理員

現会長 阿曾清浩 昭和 35 年生。平成 27 年～現在会長、令和 3 年～自然公園管理員

阿曾 令和 4 年、八幡山岳会は創立 70 周年を迎えます。長年、会に携わってこられた顧問のお 2 人と私との鼎談を企画しました。山岳会の今昔、思い出話、将来に向けた提言など、自由闊達に語っていただきたいと考えております。

さて、最初に八幡山岳会の発足のころのことをお聞きます。

堀 18 歳か 19 歳のころだと思うので、昭和 29 年 11 月ころのことかと思うが。

阿曾 これは酒田山岳会に入った時ということなのか。それとも八幡山岳会が出来た時ということ。

【山岳会発足のころ】

堀 それをはっきり分からないのよ。4、5 年、酒田山岳会の籍に入っていたことがあった。八幡山岳会として昭和 27 年に発足してからも、酒田山岳会の月例会に行ったりしていた。つまり酒田山岳会の中の八幡山岳会みたいなものだったと思う。八幡で発足したのは、荒町と市条にほろけくせ奴らがいたもんだから。

芝田 市条に小野浩治が親分になって、市条山岳会的なものがあった。そして観音寺に大黒屋の親仁が頭の集団

があった。

堀 荒町には荒若連中というのがあるって 5、6 人連れで東北をあちこち自転車旅行に行っていたが、そのうち山登りをするようになった。朝日連峰に行ったとき、天気が悪くなって煙草も食糧もないまま、3 日も山小屋に閉じ込められたこともあった。そのうち市条でも山登りをするようになった。

芝田 市条と観音寺と荒町がまとまって、八幡山岳会的な集団に発展した。しかし装備もなにもないものだから、酒田山岳会に入ることになりお世話になった。豊田眼科の豊田会長は短気な人で、大親分気質な人だった。

堀 山に行ったら、自分の気に入らないことがあると「うるせえ」とすぐ怒鳴る。それでも教えられたことに「地図は破れるくらい読み込め」といわれたものだ。等高線が 20m 間隔だから、ちょっと違う方向へ行くととんでもない所に出してしまう。

阿曾 その頃は交通便が良いわけなかったから、例会に行くたって大変だったろう。八幡の中で会員が固まって、籍は酒田山岳会に入っていた。堀さんが山岳会に入ったのは何時ころですか。

堀 昭和 30 年 11 月のことだと思う。昭和 28 年に吾妻山の県大会に八幡山岳会が参加したのさ。荒町の鍛冶屋、小松清さんらが出場した。中学のころ前田生也先生が音頭を取って鳥海山に連れて行ってもらったので、山に興味あった。

【鶴間池小舎建設】

司会 芝田さんはいつごろ山岳会に入っているの。

芝田 私の場合は、昭和 37 年ころかな。最初の鶴間池小舎を建てる前の年。小屋を建てるということで入れられた。大工に現会長の父親の功吉さんや市条の松田清さんなんがいたんだけど、この人らは全く建てる気がなかったもんだから。

堀 昭和 32 年に建てたのが初代の鶴間池小舎で、電力の資材小屋の材料を買って建てたものだった。そこへ観音寺と福山の小学校が合併して八幡小学校ができた。鶴間池小舎を建てたいということで観音寺小学校の解体材を買ってきて、松田さんらが材木に刻みは入れていた。

芝田 15 歳で守屋大工に弟子入りし、5 年の修行と 1 年の御礼奉公を経て 21 歳でまあ一人前になった。修行中足場から落ちて、6 か月入院し 2 か月湯治したら奇跡的に背骨が元通りになっていた。大工は月に 2 日しか休みがなかった。百姓は早苗饗だ、土洗いだと宴会があり羨ましかった。入院中、修行が終わったら遊んでやるぞと…。そこで賃金を貰えるようになった昭和 37 年 8 月、12000 円を持ってユースホステルを宿に岩木山と八幡平に行ったのが鳥海山以外で登った最初の山。そこから東北の山を歩くようになった。以前、建設組合の総会の時、阿曾功吉さんから「一人で山登りしてるって」と聞かれ、翌日小野浩治さんが誘いに来た。「山岳会に入らなくていい」と断っていたが、鶴間池小舎の建設に協力してほしいと口説かれて山岳会に引っ張られた。

阿曾 鶴間池小舎を建てた当時の山岳会の会長さんは誰だった。

芝田 後藤スキー屋の後藤藤彌さんで、発足当時からずっと長くやられた

方だった。40 歳半ばころかな。

阿曾 そのころの山岳会の会員は何人だった。

堀 はっきりは分からないが、活動していたのは 10 数人だと思うが、名前ばかりの会員を入れると 30 数人はいたかな。昭和 28 年の吾妻山の国体に行くとき、テントがなかったので当時の金で 2 万円のテントを買った。金もなかったのの後藤会長が一時立て替えをし、その返済に月賦払いで 13、4 年かかった。
(※当時の大卒初任給が 5600 円)

【会長選出の経緯】

芝田 山岳会の規約附則に「昭和 27 年 4 月 1 日施行の規約は廃止する」とある通り、昭和 27 年が八幡山岳会の設立年になる。初代会長が後藤藤彌さん。そして 2 代目会長を選ぶとき、仕切ったのは小野浩治さんで、市条三区の公民館に全員を集め、規約をつくり、発会式をした。あれこれ世話を焼いたのに、前田久二さんを会長に押し、自分が副会長になればいいのに、「芝田どこ、さへっちゃ」と副会長にさせられた。

阿曾 なりたくてなった訳じゃない。

堀 そんなもの、なりたい人なんて誰もいなだろうが。(笑)

芝田 まもなく前田会長が卒中で倒れた。山にも登れないし、会にも来れなくなって、副会長が会を仕切ることになった。会長になれと勧められたが、まだ会に入って 20 数年しか経ってないし、「40 代前半の野郎っ子だから」と断って、会長代理を 3、4 年務めた。

司会 会長不在に心配はなかったのか。

堀 「久二さんはそのうち良くなる」とかこつけて、そのままだったなや。

芝田 3、4年して「いつまでも代理ではまずい」ということで、正式に会長になった。

阿曾 すると初代会長は後藤藤彌さん、2代目は前田久二さん、3代目は芝田さんになる。

芝田 4代目は前田桑夫さん、5代目は堀勝幸さん、そして6代目は阿曾清浩となる。前田桑夫さんが辞める時、後藤屋旅館で総会だった。次が決まらなくて、参加者をどう見まわしたってこの場に不在の堀さんしかいないのよ。そこで総会の中で、「俺が戻るまで絶対乾杯するなよ」と釘挿して、堀さんの家に行ったのよ。そうしたら逃げない。総会で次に会長を押し付けられるのを察していたものだから、いつもなら来る総会に来ない。そこで奥さんに「まず一杯飲ませっちゃ」と上がった。2杯目を飲んだところで、「実は、旦那さんを会長にさせなくてはならないのでお願いに来た」と言ったら、奥さんは「私は分かりません」というばかりで埒が明かない。「おめへの親父さねど、八幡山岳会は駄目なってしまう。絶対すんなあぞ」と念押しして会場に戻り、「堀さんが5代目会長だ」と宣言して乾杯したなや。

堀 昭和37年から観音寺製材所に勤めるようになったが、前田久二さんも同じ職場だった。当時はオリンピック景気で仕事が忙しかった。山の大会や行事に前田さんが休んでいくので、同時に二人休むのは許されなかったのよ、どうしても大会や行事には出づらかったな。

阿曾 私が入ったのは19歳の時だから。昭和53年のこと。高校を上がってまもなく入った。入会申込書などなかったと思うな。

芝田 (書類を広げて)これが佐藤巧朗さんと石川一夫さんが入会した時の許可書。「このたび八幡山岳会に入会の申し込みをいただきありがとうございます。早急役員会を開き、入会の承認を得られましたのでお知らせします。今後は八幡山岳会会員として自ら自覚を持ち会員諸氏と相互の親睦を図り、また知識と技術の研鑽を積み佳き岳人となられますよう……」私、この平成9年は会長代理だった。

堀 山岳会の会員2人が保証人になっていたはずだが、このときの保証人はだれ?保証人がいないと遭難した時の捜索の費用をだれが負担するのか問題になる。会としても責任があるという姿勢で、山形でもどこでも山岳会入会には保証人を立てていた。山岳保険などない時代だったからな。私の場合、荒町の前田久二さんと小松清志さんが保証人。

【恒例正月登山】

阿曾 続いて、今は会の行事としてやっていないけど、正月登山のことを話して。

堀 会長の親父、功吉さんは私よ1年半前に入会したはずだ。正月休み、何としても山で納豆汁食べなくてはならないということで、元旦の朝登った。「荷物を背負え」と直接は言わなかった。油揚げこんにやくは重たいだろ。お前も食うんだから油揚げを背負えという態度だったな。

芝田 前川の自宅から安田まで歩いて朝一番のバスに乗り、草津の昭平橋で降りそこから徒歩で登る。除雪なんかしていから、湯の台に着くのは昼になった。

阿曾 元旦登山は何年ころから始めたのかな。

芝田 昭和 30 何年かな。「昭和 38 年に正月登山が始まった。その時、俺はスキーも冬山の装備も何もないのよ。そうしたらスキー屋から「スキーあるからやる」と言われ、右と左の違うスキーを貰った。それを背負って正月登山に行ったことを思い出した。

堀 スキーに右も左もあるまいが。小野さんは鉄板でつないでいたものやらなんやら、みんなから集めて全部折った。

芝田 シールも何もないから縄巻いで行った。縄シール。

堀 大工がこしらえたスキーは金属エッジ付いてないだろ。だからシールを付けられたが、エッジの付いているスキーだと擦れてシールが切れた。

芝田 (木製のスキーを出してきて) こんなの見たことないだろ。これを後藤スキー屋で作ってもらった。滝の小屋から東物見の上の稜線を下りる時、滑る技術も経験もなかったので転んだ。するとスキーの片方が草津川まで流れてしまった。

堀 スキーが外れて滑り落ちた時は、ずっと見ていろと教えられた。なぜかという滑ったスキーが斜面のこぶで跳ねて雪に刺さるから、その位置を確認してしてから取りに行く。

阿曾 私も、先日亡くなった青木さんから教えられたもんだ。

芝田 私は小野浩治さんからこう教えられた。「冬山登山するときは、山小屋は無いものと思え」と。だから絶対に滝の小屋に泊まらないのよ。いつだって雪洞を掘って、テントを建てて泊った。正月は市内の高校の山岳部員も 4、50 人、滝の小屋に冬山合宿に来ていた。

引率の先生が一升瓶を提げてきて「どうも」と飲んだものだ。

阿曾 すると八幡山岳会の初めのころは、夏山は個人で山行し、冬山はみんな助け合って登るという感じなのかな。

堀 そういう訳ではない。しかし、夏でも冬でも山で泊まるとなればテントが必要だろ。冬のテントは夏に比べれば 3 倍も重くなる。食糧とテントを分担して担がなくてはならない。11 月のうちに滝の小屋に食糧を預けて置いて準備しておく。

阿曾 正月登山は何年くらい続いたかなあ。

芝田 何 10 回行ったか分からないよ。当時の職人は、大晦日まで仕事をして、正月 5 日まで休みだった。だから正月に登って、山で 3 泊して 4 日に下山の予定で行く。4 日、5 日になっても下山してないとすると遭難したかということ、下にいる仲間が救助の登山に出かけることになっていた。味噌や米を背負って登るが、滝の小屋まで行けるのは何度もなくて、大抵は一本杉までしか行けなかった。一本杉のところは平らなところだから、滝の小屋の雪庇に雪洞を作るようにいかないの、そこいらの木を伐ってインディアン小屋といったものを作る。

堀 昔の西部劇に出てくるような三角錐か四角錐に支柱を組み立てる。

芝田 昔の苗代で使った油紙を巻いて持っていき、支柱にそれを張り、その上に雪を乗せ、イグルーのような雪のテントを作る。アイヌのようなテントだと小野浩治さんから聞いた。

【競技登山の思い出】

司会 二人が会長時代の思い出に残ることを聞かせてください。

芝田 青森国体で3泊4日八甲田山に行った時のこと。昔は競技登山だった。走ってはだめだが時間を競った。学科試験もあり天気図を描く試験もあった。地形図をみて標高差はいくらとか、この登山道にある高山植物の名前を5つ書きなさいとか。A地点からB地点までは何分で歩きなさいとか。食事計画も提出させられた。難しいのは、登山道の途中に赤い旗が立っており、そこが2万5千分の1の地図上のどこに位置するのか、1センチの丸を記入する。

堀 まともに正解する人はいなかったな。天気良ければ見える頂なり2点を取って、方角から出せる。3点取らなくても登山道上にいるのなら2点で出せる。登山道を外れたところでポイントを落とし込むとなると描けるものではない。

芝田 最終日は午後3時までにゴールに到着しなければならない。3時にNHK第二ラジオで天気予報が放送される。(※現在は午後4時から20分間が気象通報)それを聞いてラジオ用小型天気図に等圧線を書いていかななくてはならない。

堀 風速ならいいが、風力いくらという発表なので、天気図に何本線を入れるか迷う。

芝田 その時一緒に行ったメンバーは市神の土井義博さんと升田の高橋久さんだった。山形県山岳連盟から監督として鶴岡山岳会の1人が同行した。前の年、摩耶山で予選会があった。その時は私がリーダーで同行は高橋久さん、阿曾清浩さんの2人。朝日村の倉沢から登るのだが、国体に出場するのは開催地の鶴岡とすでに内定した状態での大

会だった。その予選の最初の日、地元鶴岡の選手の応援に鶴岡の関係者が大勢集まって来て酒のみをした。翌日の出発時刻になっても二日酔いで鶴岡の連中は全然歩けなくなった。キャンプ地は水場がなく下の水場に行ったが足がもつれて上がれないときた。そうこうして全日程を終えたけれどこれでは鶴岡を東北大会に出すことは出来ないと県岳連の人が決めた。じゃあどこのパーティーを出すのとなった時、八幡山岳会にお願いしようとなり俺たちが出るようになった。

【青森・八甲田山】

阿曾 八甲田山での競技の様子を少し詳しく。

芝田 事前に食事計画書を出すんだが、テント泊の最終日、審査員が計画書を持って「今晚は、今日のメニューは何ですか」と点検に来る。「ちょっと違いますね」なんて審査していく。それくらい細かいところまで審査対象だった。次の朝は、装備検査。リュックから装備を地面に並べさせて点検だ。

堀 予備の食料まで出させられて、残っていると「余分にある」と言われて減点出される。

芝田 ラジューズの灯油についても点検される。高橋さんのポリタンクにたっぶり残っていたのを土井さんが見つけ、「使っていないのはまずい」となって、「捨ててこい」と言う。「馬鹿野郎、テントの近くに捨てたって、香りがするからすぐ分かる。どうせ俺たちはビリだから減点されたっていい」と居直ったものだ。競技のスタートは40分で登る区間だったが、気温が高いので2人が歩けなくなった。缶入りのトマトジ

ュースの出始めで、これを飲むと最高に元気回復したもんだ。トマトジュースを3本入れていったので、ヘトヘトな2人に1本ずつ飲めと出した。そうしたら土井さんが「勝手に持ってきて、なぜ飲まねまねなや」と切れた。全然歩けなくなって、最終日は2時半到着が4時近くなってしまった。到着後天気図を描くのだが、遅れた3パーティーは、録音しておいたラジオ放送を聞いて天気図を描いた。あの2人にはがっかりさせられた。

堀 私たちが入ったころは、国体選手は全県からの選抜だった。

芝田 予選会の地元が優先で、選抜して選手を出していた。

堀 社会人2人、高校生2人、監督の5人パーティーだった。選手が選ばれると顔合わせを兼ねて合宿を2、3回やった。それぞれ得意分野を聞き、担当を割り振ったもんだ。

芝田 ところが競技登山はこの年で終わりになって、次の年からはボードを登ればよい大会になってしまった。それで町体育館にクライミングボードを手作りした。

阿曾 平成4年のべにばな国体のころからクライミング競技はあった。踏査、縦走、登攀の3種目があった。

芝田 いや、クライミングは前からあった。ただしボードを登るんじゃなくて、自然の岩壁を登るだけだね。

堀 踏査は登山道のない所に行く競技。

阿曾 早い話、オリエンティERING。スタート地点とゴール地点の間にチェックポイントがあって、その間は何処をどう進もうと自由。藪を漕ごうが何だろうが要するに早く着けばいい。

【酷暑の大朝日岳】

阿曾 堀さんの思い出は。

堀 特別ないが、朝日岳の尾根歩きで水が無くなった時のことかな。大朝日岳登山に八幡からも2パーティー出た。前泊を除くと2泊3日の日程で、長井から葉山に登り、八形峰を越え中沢峰、御影森山、平岩山を経て大朝日岳登頂だったのだが。日照りのきつい年で、山形県全部で200人が大会に参加していたと思う。尾根歩きなので、水場は山を下って汲みに行く。中沢峰を下りたところ、水場に5分ほど下りたが水がない、更に5分も下ったがやはりない。また下り見つけたその水は泥水だった。寝袋を包んでいたビニール袋を出して15リットルも汲んで、2人で棒に括り付けて担ぎ上げようとしたが枝に引っ掛かって上がれなかった。仕方ないので交代しながら苦労して担ぎ上げた。平岩山まで上がったが、皆くたびれていて大朝日岳登頂は無理だと山岳連盟が判断し、アカハナ尾根を通過して今の祝瓶山荘に下りて行った。そこからはダム工事のトラックに乗せられて長井まで行った。

【置賜へ指導員の勉強】

阿曾 堀さんが入ったころ、山岳指導員はいたのですか。

堀 指導員という人はいなかった。結局俺たちは、酒田山岳会の豊田会長と斎藤清吉さんの2人から教えられた。

芝田 山岳連盟がべにばな国体を運営するため指導員を養成した。

阿曾 どんな勉強をするの。

堀 小論文を書かなくてはならない。

芝田 山に対する思いはどうあって、

それをこのように伝えていくといった決意を書く。小論文の書き方の本があったので、少し読んで勉強した。

阿曾 あ頃は指導員に1種と2種があった。

芝田 俺たちは2種しか取れなかった。

阿曾 俺たちの時代になって、山形国体があるとなって、何年か前から準備をするとあって毎週みたいに講習があった。

芝田 10年通ったよ。

阿曾 10年間の学習で指導員を取らせられ、山形国体に従事させられた。

芝田 寒河江から長井に行く国道が整備されてなかった頃だったので通うのが大変だった。

阿曾 山岳会主催の競技の講習会が飯豊町町民総合センター「あーす」であった。県内から集まるとすると地形的に真ん中が飯豊という考え方。当時、飯豊に清野さんとか役所務めの人たちがいるものだから適地だとなった。内陸の人たちはいいが、私たちは大変だった。

芝田 今は立派になったが当時はくねくねと曲がった狭い山道だった。小野浩治さんなんかすぐに行かなくなったから一人で通うことになった。

堀 昔は山岳連盟で講習会となると3、4日やったものだった。指導するのが山形東高校出の県庁の職員たち。指導する人にもよるが、威張ったように感じたものだったな。

【会の将来の方向性は】

阿曾 私が山岳会に入って40年余り、会長2年目になる訳だが、会員が40人以上いる。前はどうかだったかな。20人切った時もあったと思うが。

堀 一番少なかった時で16人ということがあった。昭和30年から40年初めのころかな。

阿曾 以前は八幡の人ばかりだったが、今は八幡以外の若い人たちも結構入ってきていることについて、お二人の考えはどうですか。

芝田 八幡に限らず入会してくれていい。会長があちこち声掛けしてくれているおかげで、酒田周辺のほかに新庄市の人もいる。

阿曾 黒田さんが八幡以外から入った最初の人だった。土井義博さんは別格だし。その後余目の工藤さんが入ったが途中で辞めた。そんなもんだから俺と池田久浩はいつまで経っても下っ端よ。そういった時代がずっと続いた。

堀 昭和30年代は最高の登山ブームだった。(※昭和32年くらいから、若い人達の間には急速な登山ブームが巻き起こった。昭和31年5月9日の日本山岳会のマナスル登頂が第1次登山ブームを起こした。)毎月11日の例会は後藤スキー屋の店の後ろの居間でやった。昭和39年のオリンピックまでは毎晩誰か彼か来ていて、天気図の書き方とか勉強した。イモヤの実さんが測候所から天気図のひな型をもらってきた。だから晩方になるとスキー屋に顔出しに行っていた。

阿曾 今後、80周年に向けて活動することになるが、先輩として期待することとは。

芝田 私はガイド協会を立ち上げた。山岳ガイドするにはガイドの資格が必要になる。資格を取れば全国の山のガイドをすることができるが、本当のところ鳥海山をガイドできればいいと思っている。一般向けのトレッキング、例えば「峰桜を見るツアー」、「鶴間池

の新緑を見る」、「影鳥海を見る登山」など、地元だからできるイベントをしてほしい。銚立から登って千畳ヶ原に下り黄色に色づいた草紅葉を見るなど、自然を楽しんでもらえるような企画をしてほしい。春早い時期、横堂から東物見、西物見と雪の稜線を登り峰桜を見に一般の人が行くには難易度が高い。山岳会が連れて行ってくれるのなら安心して楽しんでもらえる。

阿曾 堀さんはどうですか。

堀 我々が若いころは冬山の雪渓歩き、ロープ確保などの訓練をしていた。滑落となった場合、ロープにピッケルを通さなくてはならないがそうそうまくいくもんじゃない。右手にピッケル、左手にロープを持ち3人がつながって歩いていく。確保するにはピッケルにロープを巻き付け雪渓に刺さなくてはならない。雪渓で滑った時は腹を切る覚悟で刺せと言われたものだ。鋼鉄製のピッケルは錆びないように刀みたいに磨いたものだ。今、若い人たちが入ってきて、冬に鳥海山山頂まで登った人も出てきている。クライミングの練習もしているので、訓練を積んで冬あるいは春の雪山の登山にも行ってほしいものだ。

阿曾 お2人のご健康とご活躍をお祈りし、鼎談を終わります。

鼎談は令和4年6月1日、芝田氏のゲストハウスにて行われた。

(聞き手・構成 佐藤弥)

